

定家白筆『拾遺愚草』の「あか月」

——「^{あかつき}暁」の表記——

On the word "Akutuki" in Shûigussô

阿久澤 忠

Tadashi Akuzawa

一、問題の所在

『拾遺愚草』(上中下)は藤原定家が自分の詠んだ歌を自分の手で書いて収めた私家集である。この歌集の歌には「^{あかつき}暁」という語が使われ、その表記には漢字一字の「^暁暁」、^(注1)全て平仮名の「あかつき」、仮名と漢字を交えた「あか月」とがある。

本稿が問題にするのは「あか月」の表記についてである。というのは「^{あかつき}暁」はこの時代、夜半過ぎから夜明け近くまでの暗い時分を意味する語であって、そこには天体および暦の「月」とは関係がないと見られるのに、なぜ「月」という漢字が使われているのか、という点である。

二、『拾遺愚草』の「月」

『拾遺愚草』^(注2)に収められた歌の中には贈答歌での他人の詠も若干交じっている。その歌を除くと、定家自詠の歌は二七九一首である。これらの歌の中に「^{あかつき}暁」の語は十八例ある。「暁」の表記のもの四例、「あかつき」が五例、「あか月」が九例である。この「あ

か月」の表記を問題にする時、逆に「月」の語がどのように表記されているのかを見ることが先決であろう。

「月」の語は右の二七九一首中三七四例見られる。ただしこの中には定家の筆でないものも交じっており(十三例)、^(注3)それを除くと三六一例である。このうち一例のみが「つき」と仮名表記であるが、他は全て「月」の漢字表記である。また、「月」の熟語に「^{かげ}月影」(七十例)があるが、その六十八例までが漢字の「月」であり、残る二例が「つき」と仮名表記である。他の「月」の熟語には「^{つきひ}月日」(二十二例)、「^み三日月」(三例)、「^{もちつき}望月」(五例)、「^{つきよ}月夜」(一例)、「^{としつき}年月」(三例)、「^{つきくさ}月草」(四例)があるが、「月」の部分^(注4)は全て漢字の「月」で表記されている。

だが、「月」の一例、「月影」の二例のみは「つき」で書かれている。しかしそのように書かれた事情が考えられる。それは「つき」の字の右側の行の並びに「月」の字が置かれていて、

月は秋ともたれかとふべき

つきゆへにさゝずはしばし…… (上八一オ)

となっている点である(原文の「つき」の字母は「徒幾」。濁点は

こちらで付した。なお原文の和歌は、若干の例外を除いて上の句(五七五)と下の句(七七)を二行に分けて書いてある。

定家自筆本で隣接した行で同じ語などが並ぶ時、仮名の字母を変えて示したり、どちらかを漢字ないし仮名に書き換えて示す例のあることが既に指摘されている。^(注4)この「つき」の仮名表記もこうした事情によるものであつて、右隣に「月」の字がなければこゝも「月」と漢字で示されたものと考えられる。

「月影」の二例の場合もこの「つき」の場合と同様、右側の行の並びに「月」の字が置かれている。

まつにたがはぬ月のかげ哉

いづるよりてるつきかげのきよみがた(上一八ウ)

月にさえたるまつかぜのこゑ

つきかげは秋よりおくの……(上八二オ)

これらも「つき」と同様の事情が考えられ、右隣に「月」の字がなければこゝも「月」の字で書かれていたであろう。

以上の点から、定家は「月」の語を書く時、徹底して「月」の字で書くということが見て取れる。そしてそのことから「暁」の語を「あか月」と書いたことはその「月」の意味と無関係に使っているとは考えにくいであろう。

三、「月」とともに使われた例

ところで、「暁」の語を使った歌には「月」とともに使われている例がある。それは十八例中次の三例である。

①おもひいでよたがきぬくのあかつきも／わがまたしのぶ月ぞ見ゆらん(上一三四ウ)／は上の句と下の句の境を示す

②春はたゞ霞許の山のはに／暁かけて月いづるころ(上一三九オ)

③たのもしなあか月ちぎる月かげの／かねてすむらんみよしの、たけ(上九五オ)

次の例は「ありあけ」の語とともに使われた例であるが、「ありあけ」は、まだ月が空に残っているうちに夜が明けることを意味するので、この語自体に「月」の意が間接的に示されている。

④ありあけのあか月よりもうかりけり／ほしのまぎれのよひのわかれは(下八七ウ)

このように「暁」の語とともに「月」を使った歌は右の四例であるが、「暁恋」(上一〇八オ)、「暁鹿」(中六八オ)のように、歌の題に「暁」が使われ、その歌に「月」を使った例が『拾遺愚草』の歌全体で十八例見られる。

以上のように、「暁」とともに「月」を使う、すなわち暁の時刻に空に月がある、という発想の歌があり、このことが「暁」と「月」を結び付けた「あか月」という表記となつてあらわれているのではないだろうか。しかも定家は自詠の歌で「月」の語を徹底して「月」の字で書いているところから、この「あか月」に「月」の意を込めて使った可能性が高いのではないだろうか。しかも右の④の例はそのことをさらにいっそう示していると考えられる。そう考える根拠は二つある。

一つは、「ありあけのあか月」とあつて、「ありあけ」のあとに「あか月」が置かれている点である。『拾遺愚草』の定家自詠自筆の歌に「ありあけ」の語は右の④の例を含めて四十例みられるが、その半分の二十例までが「ありあけ」のあとに「月」を置いた「ありあけの月」とあるものである。この点から見ると、「ありあけのあか月」という言い方と表記は、この「ありあけの月」という言い方と表記から発想されたものではないだろうか。そうであればこの「あか月」にははじめから「月」の意味が込められていたことになる。「あか月」の「あか」についても「明かき月」の

「あか」との連想が考えられ、「ありあけ」と「あか月」との結び付きには違和感が少なかったのではないだろうか。しかも「ありあけ」と「暁」とは意味の上で重なるところがあり、「暁」が夜明け近くの時間帯を指して言う時には「ありあけ」の時間帯と重なるのである。この意味の近さも両語を結び付けるのに違和感を与えなかったものと考えられる。

二つ目の根拠として挙げるのは、④の歌が古今和歌集の「ありあけのつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうき物はなし」(恋三、六二五)を踏まえて作られていると考えられる点である。というのは「ありあけ」「暁」のみならず、「わかれ(別れ)」「うし(憂し)」の合計四語もが④の歌にも使われているからである。しかもその共通した四語を使って、古今集では「暁」ぐらい「うき物」はないといっているのに対し、④の歌は、その「暁」以上に「よひ(宵)」の「わかれ」の方が「うし」、といっているものである。こうした両者の歌の内容からいっても④の歌が古今集の歌を踏まえて作ったことは明白であろう。定家は右の古今集の歌を自身の古今集の注釈書である『顕注密勘』で取り上げて評している。その評で注目するのは「我はあけぬとていづるに、有明の月はあるもしらず、つれなく見えし也。」^(註)といっていることである。つまり、定家は「ありあけ」の語に対して「有明の月」と述べていて、「ありあけ」は「ありあけの月」と同じだと言っていることである。「つれなく見え」たのはその月のことだと言っている点である。そのことから、右の歌を踏まえて④の歌を作った際、その「月」のことも定家の念頭にあって、「あか月」の「月」にその「月」の意を込めた可能性が考えられるのである。

だが、以上の二つの根拠から、④の歌の「あか月」に「月」の意が込められているといっても、この「月」が掛詞として使われているとは考えにくい。「あか月よりもうかりけり」の対象は、直

接には「わかれ」であっても、あくまで「よひのわかれ」のことであって、その「よひ」と比較されたのは「暁」という時間帯だからである。「月」の意が込められているというのは、この暁の時刻の空に「月」が出ている、ということを示して、歌の内容に意を添えている、ということであろう。そしてこの「月」が「ほしのまぎれ」の「星」と呼応しているのであろう。

なお、『拾遺愚草』より以前に成った私家集に『大斎院前の御集』があるが、そこにも「ありあけのあかつき」という言い方の歌が見られる。ただしそこでは「ありあけのあかつき月のしぎのはね……」(二三六番歌、新編国歌大観)とあるように、「あかつき」のあとに「月」が付き「あかつき月」という語でもって使われている。この歌から考えると、「あかつき月」の「つき」と「つき」とが一つになって「あか月」の表記となった可能性も考えられる。しかも『大斎院前の御集』の書写本は、定家他数人の筆による孤本のみが伝わっており(日本大学図書館蔵本)、右の歌は定家の筆によるものと見られる箇所である(下巻、本文第二丁表一行目。笠間影印叢刊44による)。このこともいっそう右の推論の可能性を高めることになる。

それでは次に④以外の、「あか月」の表記を使った八例について検討を加えることにする。

四、「あか月」の他の用例

最初に取り上げるのは、

(一)あか月はわかるゝ袖をとひがほに／山した風もつゆこほるなり(上一二二ウ)

この歌には「わかるゝ」(別る)、「袖」、「山した(下)風」、「つゆ(露)」、「こほる(凍る)」という語が使われ、これらの語はこの歌で次のような意味のつながりをもって使われている。すなわ

ち、別れの悲しみに（涙が出て、その涙が）袖にたまり、そこに山下風（山から吹きおろす風）が吹いて露（涙の比喻）が凍ってしまった、というものである。

これらの語（全てではないが）を使った歌で、この歌とよく似た内容を持つ歌が『拾遺愚草』にある。

④山風のあれにしとこをはらふ夜は／うきてぞこほるそでの月
かげ（下五五オ）

ここには「涙」の語も涙をたとえる「露」も使われていないが、「うきてぞこほるそで」とは「うき（憂き）」という思いによって生じた涙が袖にたまってそれが凍った状態になったことであり、そういう状態になったのは山から吹いてくる「山風」によってである、という内容である。

この歌で注目されるのは歌の最後に「月かげ」が使われている点である。つまり、凍った袖に月の光が映っているという点である。この、月の光が涙の凍った袖に映る、という発想の歌は他にもある。

⑤秋の夜は月ともわかぬながめゆへ／そでにこほりのかげぞみ
ちぬる（上八二オ）

ここにも「涙」「露」の語はないが、「月ともわかぬながめ」という語句は、涙にくもって月の姿が見定められないほどの物思い、と考えられるから、ここに涙が暗示されているように。

凍ってはいないが、涙がたまった袖に月の光が映っていることを示した歌に次の数首がある。

⑥秋きぬとそでにしらるゝゆふづゆに／やがてこのまの月ぞや
どかる（上一三〇ウ）

⑦をきあかすのべのかりいほのそでのつゆ／をのがすみかと月
ぞさえゆく（下二五ウ）

⑧秋風にわびてたまちる袖のうへを／われとひがほにやどる月

哉（中二〇ウ）

⑨ひかりさすたましま河の月きよみ／をとめの衣そでさへぞて
る（上一四二ウ）

⑩なれし夜の月許こそ身にはそへぬれてもぬるゝそでにやど
りて（上一八八ウ）

「涙」のことは④⑤では「つゆ」、⑥⑦では「たま（玉）」、⑧では「ぬれてもぬる」（濡る）で示されている。

こうした④⑤⑥の歌から見ても、①の歌の内容にも月の光があったとしても不自然ではないであろう。「あか月」にその月の光のことを暗示して「月」の字を用いているのではないだろうか。

⑪ひとりねのさならぬともそでぬれぬ／わかれなれたるあか
月のそら（下三五ウ）

⑫終夜花橘を吹風の／わかれがほなるあか月のそで（上六五ウ）
これらの歌には①と同様、「袖」と「わかれ」が使われている。

しかも⑫では「わかれ」「そでぬれぬ」から涙が袖にたまっていることが、⑬では「わかれがほ」「そで」から、別れの悲しみによってその顔に涙が流れ、その涙が袖にたまっていることが暗示されている。①の場合とちがってその袖は凍ってはいないが、涙がたまった袖、ということでは先の④⑤⑥と共通している。そして④⑤⑥が、その袖に月の光が映っていることを示したことから見て、①②③の場合、「あか月」の「月」にその月の光ことが暗示されているのではないだろうか。しかも②では「あか月のそら」とあって、月がそこに浮んでいる「空」のことが示され、③では「あか月のそで」とあって、「あか」月と「そで」とが直接に結び付けられた言い方となっている。

次の例は、「袖」のことは示されていないが、①②③と同様に「わかれ」の語があり、涙を暗示する「露」が使われ、①と同様に

「あか月のそら」という言い方になっている。

四うらめしや別のみちにちぎりをきて／なべてつゆをくあか月のそら（上七一ウ）

次の例は、「なくく」という語とともに使われ、ここでの「なく」は鳥が鳴く意であるが、「あか月ぞうき」の「うき（憂き）」と関連して「泣く」の意も掛けられていよう。そしてその、泣く涙という関連から「月」を連想させることも可能であろう。

五會坂のゆきゝにたつるとりのねの／なくくおしきあか月ぞうき（中七〇ウ）

次の例は（二）四にあった「空」の語が使われた例である。ただし「あか月のそら」という言い方ではない。

六花にほふ四つのおほぞらとをからで／あか月またぬあふことも哉（上一五〇ウ）

右の（五）（六）は、四までの例と比べ「月」の意との関連性は希薄である。

次の例は、（五）（六）以上に「月」とのかかわりが見られない。というより「月」の意との関連性はないと言えよう。

七ことわりやうちふすほどもなべのよは／ゆふつげどりのあか月のこゑ（中二五ウ）

残りの最後の例は先に見た、「月」とともに使われた③の例である。

なお、①②の場合も「月」とともに使われた例であったが、「あか月」の表記ではなく、①は「あかつき」、②は「暁」であった。「月」の字が使われていないのは、「月」が歌の中に明示されているので、あえて「あか月」という表記でその「月」の意を示す必要がなかったからであろう。③で「あか月」と表記したのはその「月」のことを強調しようとしたからではないだろうか。そしてこの点、④の「ありあけのあか月」の場合と似ていよう。「ありあ

け」の意に既に「月」の意が含まれているのに、「あか月」という表記でさらにその「月」のことを示しているからである。

以上、「あか月」の八例全例について検討した。次に「暁」と「あかつき」の表記の例について検討を行うことにする。

五、「暁」と「あかつき」の表記

「暁」の表記の例は次のとおりである。ただし、「月」とともに使われた先の②の例は除く。

⑧暁にあらぬ別も今はとて／わが世ふくればそふおもひ哉（上一〇九オ）

⑨あふひぐさかりねの／べにほとゝぎす／暁かけてたれをとふらん（上一二八ウ）

⑩はじめよりあふはわかれとき／ながら／暁しらで人をこひける（上一八七ウ）

「あかつき」の表記の例は次のとおりである。ただし、「月」とも使われた先の①の例は除く。

⑪たびねする夢地はたえぬすまのせき／かよふちどりのあかつきのこゑ（上三二オ）

⑫たちかへる山あゐのそでにしもさえて／あかつきふかきあさくらのこゑ（上五八オ）

⑬うかりけり物思ころのあかつきは／人をもとはむこの世ならでも（上六〇オ）

⑭やどになくやこゑのとりはしらじかし／をきてかひなきあかつきのつゆ（上一二四ウ）

右の⑧⑨の七例の中には「あか月」の（一）④の歌にあった「わかれ」の語が使われた例がある。「暁」の⑧と⑩の場合である。しかし（一）④の場合、「わかれ」の語以外に「月」との関連を示す

語が使われていた。(一)では「袖」「露」「凍る」、(二)では「そでぬれぬ」「空」、(三)では「袖」、(四)では「露」「空」である。しかし②③にはそうした語は使われていない。

「あかつき」の②には(一)(三)に使われた「袖」が使われている。しかし「月」との関連を示す語は他にはない。⑧の場合は、(一)(四)にあった「露」と(五)にあった「なく」が使われている。しかし(一)には他に「わかれ」「袖」「凍る」の三語が、(四)には「わかれ」「空」の二語が使われていた。「暁」の⑥、「あかつき」の⑦の場合は、右に挙げた諸語のうち一語も使われていない。残る「あかつき」の④の場合も同様である。しかしそれらの諸語とは別に「月」との関連を示す語が使われている。「すま(須磨)のせき(関)」がそれである。この語は「はりまぢや須磨の関屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ(千載集)」のように「月」とともに詠まれることが多いことが指摘されている。だが「月」との関連を示す語はこの一語だけである。

以上、「暁」「あかつき」の表記の用例を検討した結果、「あか月」の表記の場合と比べ、「月」との関連性は希薄であると言える。先に見たように「あか月」の用例全てが「月」との関連を示しているわけではなかった。しかし「暁」の語に「月」の意を込めて使う時には「あか月」の表記で示すことが多い、ということと言えるであろう。

六、他人の詠の場合

以上、定家自詠自筆の例を検討したが、『拾遺愚草』の下帖に収められた歌の中には他人の詠を定家が書いた例が八十四首ある。その中に一例「暁」の語が使われている。

○わが秋のふくれば冬の山をろし／つよく身にしむあかつきのそら(下一一三ウ、詠者は「山座主」)

ここでは「あかつき」の表記で書かれている。「月」と関連する語に「空」が使われているが、この語だけである。

一方、他人の詠八十四首の中には「月」の語が四例、「月」の熟語に「月日」が二例、「おぼろ月夜」が一例あるが、その「月」の箇所は全て漢字の「月」で書かれている。

このように、他人の詠での「暁」、「月」および「月」の熟語の用例数は少ないものの、その表記上の特徴は定家自詠の歌での特徴と重なるものである。

七、三代集の場合

ところで、定家自筆の『拾遺愚草』が成ったのは天福元年(一二三三)頃だと言われている。そして同じ頃定家は後撰和歌集(天福二年)と拾遺和歌集(天福元年)を書写している。またそれより以前の嘉祿二年(一二二六)には古今和歌集を書写し、さらにはその時期とさほど離れていない頃にも古今集を写し、それは現在「伊達本」と呼ばれている。これらの書写本はいずれも今日まで伝わっている。これらの三代集の歌は当然ながら定家以外の他人の詠である。これらの歌における「暁」および「月」の語はどのように表記されているのであろうか。^(注6)

まず、「月」の語の表記について結論から述べると、『拾遺愚草』と同様の特徴を持っている。すなわち、そのほとんどの表記が「月」の字でもって書かれている。例外は拾遺集にある、仮名書きの「つき」の一例だけである。

古今集の歌には「月」の語が全体で二十四例見られるが、伊達本、嘉祿二年本とも全て漢字表記である。「月」の熟語である「年月」(二例)、「月影」(五例)、「月日」(三例)、「月夜」(三例)、「月草」(二例)の「月」も全て漢字表記である。

後撰集の歌には「月」の語が全体で四十四例(このうち三例は

暦の「月」、「月」の熟語では「望月」(一例)、「年月」(四例)、「月影」(七例)、「月日」(六例)、「月夜」(一例)があるが、これらの「月」も全て漢字表記である。

拾遺集の歌には「月」の語が全体で四十三例(このうち一例は暦の「月」、「月」の熟語では「片割月」(一例)、「三日月」(一例)、「望月」(二例)、「年月」(八例)、「月影」(八例)、「月草」(二例)、「月日」(五例)、「月夜」(二例)があるが、「月」の語の一例を除いて他の「月」は全て漢字表記である。

仮名表記で「つき」と記された例(四二二番歌)についても『拾遺愚草』での仮名表記の例と同様の事情が考えられる。すなわち、この例も、

月のきぬをきて侍けるに

久方のつきのきぬをばきたれども……

とあって「つき」の字の右側の行(詞書)の並びに「月」の字があるからである。

以上のように、三代集の「月」の語の表記においても定家は『拾遺愚草』の場合と同様、徹底して漢字「月」で示そうとしたことがわかる。

一方、「暁」の語は、古今集に三例、後撰集に十例、拾遺集に八例見られる。その表記は古今集集と後撰集の場合、全て漢字の「暁」である。拾遺集も五例までが「暁」であるが、残る三例は「あか月」である。次に示すのが「暁」の語を使ったその全歌である。なお、『拾遺愚草』の場合と異なつて一首は一行書きである。古今集の例は伊達本の表記で示すが、「暁」の表記に嘉禄二年本の異同はない。

古今集

①有あけのつれなく見えし別より／暁許うき物はなし(六二五番歌)

②ほとゝぎす夢かうつゝかあさつゆの／おきて別し暁のころ(六四二)

③暁のしぎのはねがきもゝはがき／君がこぬ夜は我ぞかずかく(七六一)

後撰集

①暁と何かいひけむわかるれば／夜ぬもいとこそわびしかりけれ(五〇八)

②今ぞしるあかぬ別の暁は／君をこひちにぬるゝ物とは(五六七)

③いかで我人にもとはむ暁の／あかぬ別やなにゝにたりと(七一九)

④暁のなからましかば白露の／をきてわびしき別せましや(八六二)

⑤つねよりもおきうかりつる暁は／つゆさへかゝる物にぞ有ける(九一三)

⑥我のみは立もかへらぬ暁に／わきてもをける袖のつゆ哉(一九四)

⑦夢よりもはかなき物は夏の夜の／暁がたの別なりけり(二七〇)

⑧郭公ひとこゑにあくる夏の夜の／暁がたやあふごなるらん(二九二)

⑨郭公暁がたのひとこゑは／うち世中をすぐすなりけり(二九七)

⑩をく霜の暁をきをおもはずは／君がよどのによがれせましや(九一四)

拾遺集

①み山いでゝ夜はにやきつる郭公／暁かけてこゑのきこゆる(二〇二)

② 暁のねぎめの千鳥たがためか／さほのかはらにをちかへりなく (四八四)

③ 暁のなからましかば白露の／おきてわびしき別せましや (七一五)——この歌は後撰集の④と同じ

④ 暁の別の道をおもはずは／くれ行そらはうれしからまし (七二六)

⑤ 身をつめば露をあはれと思哉／暁ごとにかでおくらん (七三〇)

⑥ 春霞たつあか月を見るからに／心ぞ／らになりぬべらなる (三〇二)

⑦ 君をのみこひつゝたびの草枕／つゆしげからぬあか月ぞなき (三四六)

⑧ わがせこがありかもしらでねたる夜は／あか月がたの枕さびしも (八〇三)

右の用例二十一例中十八例を占める「暁」の表記の歌を見ると、「月」との関連は概して希薄である。『拾遺愚草』で「あか月」を使った歌の(一)～(四)に使われていた「わかれ」を使った例はある。古今集の①②、後撰集の①②③④⑦、拾遺集の④の計八例である。そのうち、さらに「月」との関連を示す語を使った例は、古今集の②(露)、後撰集の②(濡る)④(露)、拾遺集の④(空)である。しかしこのうち古今集の②は「暁のこゑ」とあるものであつて、「月」は「声」を出したりするものではないので、「月」とのかかわりは考えにくい(『拾遺愚草』の「あかつき」の例④も「あかつきのこゑ」であり、また、「月」との関連性は見られないと先に指摘した「あか月」の(七)の例も「あか月のこゑ」であつた)。また、拾遺集の④の「空」は、「くれ行そら」(暮れゆく空)のことであつて「暁」の空を指して言っているものではない。

次に、「わかれ」の語はないが「露」を使った歌に後撰集の⑤⑥、

拾遺集の⑤がある。そのうち後撰集の⑤と拾遺集の⑤の場合は、他に「月」との関連を示す語は見られない。それに対し後撰集の⑥の場合は、「袖のつゆ」とあつて「袖」の語が使われている。だがそれ以外には「月」との関連を示す語は見られず、『拾遺愚草』の「あか月」の(一)の歌などに比べると、「月」との関連は希薄であると言えよう。

ところで、古今集の①の歌は既に本稿の中で触れた歌である。すなわち、「三」「月」とともに使われた例の箇所で、「④ありあけのあか月よりも……」の歌が踏まえた歌であるとして論述した歌である。この歌は「有あけ」とともに使われており、「ありあけ」の語自体に「月」の意が含まれているので、「月」との関連がはつきりしている。その点で右に検討してきた三代集の歌の傾向とは異なっている。だが、この歌で「あか月」の表記を使わなかったのは「三」の箇所を検討した、「月」とともに使われた①②の例の場合と同様の理由からであろう。すなわち、「ありあけ」の語で「月」の意が示されているので、あえて「あか月」という表記を使ってまでその「月」の意を示す必要がなかったからであろう。以上の「暁」の表記に対し、「あか月」を使った拾遺集の三例については「月」との関連が看取される。

まず、⑥の例で注目されるのは「あか月を見るからに心ぞそらに」という言い方である。「あか月を見る」という言い方に、「見る」対象としての「月」が連想されるからである。しかもその語句のあとに「そらに」とあつて、「月」が出ているその「空」が連想されるからである。

次に⑦の歌には「露」の語が使われるが、その歌で注目されるのは、その「露」とともに「(草)枕」という語が使われている点である。そして両語は「草枕つゆしげからぬあか月ぞなき」という言い方でもって「あか月」の語に掛かつてゆくが、ここでの意

は、(草の)枕に露がびっしりと濡れない。暁はない、という意であり、さらに詳しく言えば、あなたのことを恋いしたって枕が自分の涙でびっしり濡れるばかりの暁である、という意である。涙の露が袖にたまってそこに月の光が映る、という発想の歌は既に見てきたが、涙の露が枕にたまってそこに月の光が映る、という発想の歌も『拾遺愚草』に見られる。

①袖のうへ枕のしたにやどりきて／いくとせなれぬ秋の夜の月
(上八三ウ)

②浪枕はまかせしらくやどる月／そでのわかれのかたみがほなる
(上一七七ウ)

③草枕みやこをとをみいたづらに／ゆきゝの月のやどるしらつゆ
(下三一オ)

④かぢまくらたれとみやこをしのばまし／ちぎりし月のそでに見えずは
(下九八オ)

右の①②④は「袖」との関連から「涙」が示されているよう。右のこうした歌から見て、拾遺集の⑦の歌にも「月」が映っている、と定家は判断してそれを「あか月」の表記で示したものと考えられる。そしてこのことは残る拾遺集の⑧の場合にも言えるであろう。ここでも「枕」が使われ、しかも「枕さびしも」という言い方から、泣いて枕に涙がたまっていることを連想させるからである。

以上、三代集に使われた「暁」の語の表記を検討した結果、定家は「あか月」を使う際、自詠の歌の場合と同様に、そこに「月」の意を込めて使うという特徴のあることが見て取れた。

しかしこのことは、「あか月」という表記も定家が作った、ということの意味しない。定家と同時代の書写本にもその表記が見られるからである。例えば古今集の場合、「暁」の語三例について、久曾神昇氏の『古今和歌集成立論 資料編』(風間書房)によれば、

その三例とも「あか月」となっている写本がある。鎌倉時代中期頃の書写本であろうとされる「永治本」においてである。同じく鎌倉時代中期とされる「前田本」では、先の①③の例が「あか月」である。また、弘安元年(一二七八)に寂恵が書写したとされる「寂恵本」でも①②の例が「あか月」である。さらには、鎌倉時代中期ないし後期書写とされる「雅俗山庄本」でも三例とも「あか月」となっている(ただし、②は「あき月」)

このように三例全て「あか月」を使った写本もあるという点から考えると、「暁」の語を「あか月」と書くことは定家の時代、かなり広く行なわれていたのではないだろうか。しかも、「月」の意味とはかわりなくこの表記が使われていたことも示唆している。

八、詞書での用例

ところで、これまで詞書に使われた「暁」の語については言及してこなかった。『拾遺愚草』の詞書にその用例が見られないからである。しかし右に述べた古今集の詞書には三例見られる。一六六、一八二、三七七番歌の詞書にである。そのうち三七七番歌の詞書は定家自筆本では次のように書かれている。

きのむねさだのあづまへまかりける時に人の／家にやどりて暁(嘉禄二年本は「あかつき」)いでたつとてまかり申しければ女のみみて／いだせりける(／はそこで行が変わるところ)

「暁」の語はこのように「あか月」の表記で書かれていない。そしてこの詞書の文全体からも、またそのあとに置かれた歌「えぞしらぬ今心見よいのちあらば／我やわするゝ人やとはぬと」からも「月」とのかかわりは特に見られない。だが古筆の一つの「荒木切」ではこの「暁」は「あか月」と書かれている。「荒木切」の

書写年代は、久曾神氏によると鳥羽天皇御代あたり、すなわち十二世紀中頃だという。また、これより早く十一―十二世紀とする見解もある。^(金) いずれにせよ、定家が『拾遺愚草』や三代集を書写する以前のことである。つまり定家以前にも「あか月」の表記は使われ、しかも「月」の意と特にかかわりのないところでも使われていたということをうかがわせる。

なお、一八二番歌の詞書での用例も特に「月」との関連は見られず、定家は「あか月」で書いていない。伊達本は「あかつき」、嘉禄二年本は「暁」である。だが、一六六番歌の詞書の用例は、伊達本では「あかつき」であるが、嘉禄二年本では「あか月」で書かれている。その詞書の文を見ると「月のおもしろかりける夜あか月がたによめる」とあって、「月」とともに使われている。

以上のように、「あか月」という表記は定家以前から使われ、定家の時代にも、またそれ以降にも使われていたことがうかがえる。ただし、定家以前といっても、十世紀初期成立の古今集の原本は、歌、詞書、左注とも全て仮名表記で書かれていたと推察できるので、原本そのものにこの表記が使われたことは考えられない。さらに十世紀中頃成立の後撰集の原本、十一世紀初期成立の拾遺集の原本の場合も、事情は古今集と同様であったであろう。

九、定家が「あか月」を使った理由

それではなぜ定家は「あか月」の表記を「月」とかわつたところで使ったのであろうか。拾遺集で「あか月」を使った例は、あえてそこに「月」の字を当てなくても、一首全体の内容からそこに「月」を連想することは可能であったろう。

ところで、これまで「あか月」の表記に集注して論を進めてきたが、ここで「暁」の表記で書いたものに注目すると気付く点がある。それは、『拾遺愚草』の「暁」の四例全例がいずれも行頭に

置かれている、という点である。一行目(上の句)のはじめの例が一例(㉑)、二行目(下の句)のはじめの例が三例(㉒㉓㉔、それと㉕)である。それに対し、「あか月」の場合、行頭に置かれた例は九例中二例(㉖㉗)、「あかつき」の場合も五例中一例(㉘)のみである。「暁」の例が行頭にのみ置かれたのは単なる偶然であろうか。三代集での歌は一行書きで書かれているが、「暁」の字は上の句と下の句のはじめに置かれた例が十八例中十一例までである(上の句のはじめは古今集の③、後撰集の①④、拾遺集の②③④、下の句のはじめは古今集の①、後撰集の⑦⑧、拾遺集の①⑤)。上の句のはじめ、下の句のはじめに漢字一字の語を置くことは、それぞれの句がどのような語で始まるのかを、漢字の持つ表語性によって、読む者にたちどころにはっきりと示すことができよう。ましてや『拾遺愚草』の場合、全ての例が行頭に来るのだから、その視覚的な効果はいっそう大きいであろう。定家はそうした漢字の持つ特徴を知っていて「暁」の字を用いたのではないだろうか。そしてそうであるならば、「あか月」の表記もそこに「月」の意が込められていることをたちどころにはっきりと示すために用いた、ということが考えられるのではないだろうか。「あか月」という表記が作られたのは、「暁」の語に「月」のイメージが結び付いているという認識が生じ、広まったのがその理由だと考えられるが、古今集の歌にその両者の結び付いた歌(先の①の例)があることは、その時期から既に「あか月」の表記が生まれる素地のあったことをうかがわせる。しかもその歌の詠者は、古今集の撰者の一人、壬生忠岑である。その後の影響力にも少なからぬものがあつたであろう(現に定家はこの歌を踏まえて「あか月」を使った歌を詠んでいる)。だが、「あか月」の表記が次第に広く使われるようになる、「月」の意を意識しないで使われるようになっていったのであろう(例えば今日、「言葉」の表記に「葉」の意を意識

しないように)。しかし定家はこの表記の出発点に立ち戻ってこの表記を使ったのではないだろうか。しかも他人の詠にこの表記を用いることは、他人のその詠に対する解釈を示すことでもある。三代集の書写は定家だけの問題ではなく、その書写本は定家以後正確に書き写されてゆくべき「証本」としての性格も持っていた。従って定家が拾遺集の三首に「あか月」を用いたことは、これらの歌に対する定家の解釈をも後代に伝えようとしたためであったと考えられる。定家自筆本の『拾遺愚草』を読んで、そこに使われている「あか月」の表記の特徴に気付いた者であれば、拾遺集の三首に「あか月」が使われたことの意味も理解できたのではないだろうか。

(注1) 一一八〇年頃に成ったとされる三卷本色葉字類抄には、「曉」

の訓読みに「アカツキ」のみが記されている(『尊経閣蔵三卷本色葉字類抄』勉誠社、二四ウ)

(注2) 『冷泉家時雨亭叢書 拾遺愚草 上中下』(朝日新聞社)

(注3) この十三例はいずれも下帖の「一一〇オ」の付紙に記された歌でのものである。

(注4) 小松英雄『日本語書記史原論』(一九九八年・笠間書院)

「第三章 藤原定家の文字遣」

(注5) 『日本歌学大系 別巻五』(風間書房)「頭注密勘抄」による。

(注6) 古今集は『冷泉家時雨亭叢書 古今和歌集 嘉禄二年本』、

『藤原定家筆 古今和歌集』(「伊達本」・汲古書院)、後撰集は『冷泉家時雨亭叢書 後撰和歌集 天福二年本』、拾遺集は『藤原定家筆 拾遺和歌集』(汲古書院)による。

(注7) 『やまとうた一千年』(五島美術館／大東急記念文庫、二〇〇五年)の目録。なお、二〇〇五年十月二十九日——十一月二十七日に開催されたその展覧会では当該の箇所も展示